

「求めよ、さらば与えられん」(7:7)。どこかで聞いたことのある言葉ではないでしょうか。世間一般にも比較的よく知られた聖書の言葉のひとつです。けれども、この言葉ばかりが独り歩きして、本来の意味が顧みられていないような気がします。では私たち教会に集い聖書に親しむ者はどうかと言えば、果たしてこの言葉の真意を十分に理解していただけるか。私は、自分はよく分かっていなかったと告白しなければなりません。

世間一般には、どのように理解されているでしょうか。辞書にはこうありました。「物事を成就するためには、与えられるのを待つのではなく、みずから進んで求める姿勢が大事だということ」(デジタル大辞泉)。もちろんそういう意味でないことは前後の文脈から明らかです。この箇所だけを見るならばそこには書かれていないのですが、前後関係から分かることは、これは祈りについての教えであり、「誰に求めるのか」「何を求めるのか」「なんのために求めるのか」という三つのことが、既に分かったものとして前提されているということです。

第一の「誰に求めるのか」ですが、これはもちろん「神に」です。世間一般では自分の努力目標とすると解されているのかもしれませんが、それでは自分に求めるということになってしまいます。もっと言えば、神に与えられるのを待っていてはだめで、自分の力で獲得しなければならないという真逆に意味にすらなってしまいます。しかし聖書が言わんとすることはあくまでも神様が与えてくださるということです。

第二の「何を求めるのか」は、これも文脈から明らかです。つまりこの少し前、6章の9節以下の「主の祈り」や6章25節以下の「思い悩むな」の説教に明記されているように、求むべきは、日ごとの糧、罪の赦し、試みからの守り、そして何よりも「神の国と神の義」であります。決して己の欲望のままに何でも求めていいということではありません。今の日本には、人の迷惑にならなければ何を求めてもよいという風潮がありますが、聖書はエゴを満たすだけの欲望を認めてはいません。

第三の「なんのために求めるのか」。これは今述べたことでもありますが、欲望のままに求める祈りは聞かれないということです。ヤコブ書にはこうあります。「願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです」(ヤコブ 4:3)。ではどのような動機で祈るべきなのか? 「み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」、これです。神様の愛を地上にもたらしてくださいということです。

これらのことは既に述べられていることなのですが、それならなぜ今ここで改めて、「求めよ」と言われているのでしょうか。祈りの相手、その内容、そして動機、そのすべてが既に述べられているのに、ことさらになぜ「求めよ」と命じる必要があったのでしょうか。さらにこれまでのところでは、天の父なる神は私たちの生活に必要なものは、私たちが求めるよりも先に既にご存じで、備えをしてくださると書かれています(6:32b-33)。なぜことさらに、「求めよ」とおっしゃるのででしょうか。

ここで重要なことは、マタイ福音書は弟子たちを神の業にあずかる者たちとして任命しているということです。神様は弟子たちなしにも御業をなさることができます。けれどもあえて単独では事をなさらず、弟子たちの参加を求められたのです。もっと言えば、わたしたちは祈りを通して神様の業に参加する榮譽を与えられているということです。神様は地上に神様の愛をもたらそうと、恵みのいっぱい詰まった袋の口をつかんで、今や開こうとしておられます。そして私たちの祈りを合図に、その口を開けようとしておられるのです。そのような形で、私たちもまた世を愛し人を愛する業に参加させられるのです。幼子が一人ではできないことを、ほとんど母親がやってやるのですが、それでも少しだけ子どもに手を添えさせてやることで、「ほら～ちゃんできたね。」と褒めてあげるのに似ています。世を愛し人を愛する者と私たちをなして下さるのです。

たとえ話を一つ。ある人が死んで天国に行き、ペトロに案内されて色々と天国を見て回っているうちに、窓のない建物があるのに目が留まりました。「あの中には何があるのですか？」と尋ねると、ペトロは「天国ではどこでも見ることができます。もちろんあの建物の中を見ることも自由です。でも、見ないほうがいいですよ。」と意味深長なことを言うではありませんか。好奇心に負けてその人が中に入ると、そこには、もし人間が祈りさえすれば神様が世界にもたらすはずだった素晴らしい愛と恵みの計画がぎっしり詰まっていたのです。祈りは、愛の業に参加させてくださる神様のやり方なのです。

でもどうでしょう、ここまでお話しさせていただいたところで、今日から自分が世のため人のために心を込めて祈る人になれそうだと思いますか。相変わらず変わらない自分…ということになる公算が強いのではないのでしょうか。今日から自分が変わる、少なくとも変わり始める、そういう力が聖書にはあります。それは今日の聖書の箇所最後の説12節です。これは「黄金律」と呼ばれる、キリストの教えたたった一つの律法「神を愛し人を愛せ」の一部です。

この言葉は「だから」という接続詞でつながっています。この「だから」という接続詞は、色々述べた後で、その後に本来言いたいことを言い出す合図の働きをしています。つまり「求めよ、そうすれば与えられる。…だから、(愛の業を) 人にしなさい。」と続くわけです。本来言いたいことは、祈るだけではなく、祈りは聞かれる、だから、愛の業をなせということなのです。行動すること、ここに力点があります。他者のために祈ることによって、その人のために行動できるものとされる、という意味合いがあります。神様に愛の袋の口を開けて愛を注いでいただくだけでなく、今度はその愛を届ける役割さえも担えるようにしていただいたということです。

では何をすればその人のためになるのでしょうか。他者のために何を祈り、何をなすべきなのでしょうか。それが「人にしてもらいたいと思うことは何でも」なのですが、ここで注意が必要なのは、その人の立場に立って、きっとこうしてあげれば喜ぶだろうと想像することではないということです。「人にしてもらいたいと思うこと」とは、ギリシア語本文によれば、本当に切実に求めていること、生きるか死ぬかの切迫したニーズのことで、

今自分に欠乏している欲求のことです。それを自分には求めずに、他人に差し出せということなのです。今自分が飢えた状態で、手元にあるパンを、他人に差し出しなさいということです。そんなことができるでしょうか。

この切迫した状態で、少なくとも私たちは、自分の飢え渴き、痛みを通して、他人の切迫したニーズを自分の事として感じる事ができるのです。豊かな状態で他人のために祈りその欠乏を、想像力を働かせて思いやっても、しょせん人ごとではないでしょうか。けれども神様は私たちを飢えさせます。私たちに欠乏を感じさせます。そのことをもって他人の欠乏がいかなるものであるかを知るのです。すると、私たちの欠乏は、他人の欠乏を知り何が必要であるかを真剣に祈り求めるためのセンサーになるのです。

ですから、苦しいことがあったら自分の救いのために祈るのではなく、同じように苦しんでいる他者のために祈り働きなさいということです。そうすれば神の莫大な力が働きだします。あるときマザーテレサが、スラムで知り合った家族にパンを届けました。するとその家族は自分たちですら少ないパンを隣近所に全部分けてしまったというのです。マザーテレサはこの出来事に衝撃を受けました。ここではっきりとすることができます。私たちキリスト者の欠乏は、他者のためである。私たちキリスト者の痛みは、他者のためである。他者に真に仕えることができるように私たちに与えられた賜物なのです。天の父は、私たちをそのような共感性のある者とするために、私たちに飢えと渴きと痛みを与えられたのです。私たちの痛みのあるところに、私たちの仕えるべき使命があるのです。障害の痛みのある人は同じ障害の痛みのある人のために祈り働き、仲間外れにされる痛みのある人は同じ疎外の痛みを感じている人のために祈り働き、世の理不尽に苦しむ人は同じ世の理不尽さに苦しむ人のために祈り働き、お金のない不安のある人はお金のない不安にさいなまれる人のために祈り働くのです。神から遣わされる者の奉仕は、高きから手を差し伸べるのではなく、同じ低みに降ってなされるのです。この飢えと渴きと痛みの切実さをもって、他者のために祈るとき、惜しみなく与えようとして愛と恵みのぎっしり詰まった袋の口が開かれ、神様の愛が降り注ぐでしょう。今静かにあなたの苦しみをみつめてください。そこにあなたの使命があるのです。